



Let's Green & Clean
一橋植樹会

一橋植樹会の歩み



第3版刊行に寄せて

本冊子は2010年に刊行されはや5年が経ちました。新たに5年の歴史が書き加えられます。キャンパスの緑は殆ど変わりませんが、それを取り巻く周辺事情や人間模様は変わっています。まさに「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」です。

国立キャンパスも既に85歳を数えます。一方一橋植樹会は創立42年となり、国立キャンパスでの植樹会の活動は半分を占めることとなります。初めの30年は主に募金活動や記念植樹の寄贈が中心でしたが、ここ12年は主にボランティアによる労働奉仕活動でキャンパスの緑の増加と保全に貢献して来ました。

移転時から現在までの映像を見て感じますが、途中紆余曲折はありますが、緑は大きく広がり豊かになっていることは間違いありません。しかしそれは外から見た森の全体像です。中から見れば緑の森を構成する木々は巨木化しつつ、将に老いが迫っているように見えて来ます。即ち植樹の必要を強く感じています。

キャンパスは大学の「教育と研究の場」であることは言を俟ちません。この緑のキャンパスを維持することは社会に有為なる人材を輩出する教育の環境づくりに大いに資するものと思います。又、世界に冠たる優れた研究を発信する拠点となる緑のキャンパスであって欲しいと願っています。

このキャンパスは、緑の森が外の騒音を遮り、静かな環境を造り出しています。暑さを緩和する、炭素の吸収と酸素の供給、そして森の精気を恵んでくれる！ 諸々のメリットを与えてくれています。森の自然の中を歩き鳥や虫の声を聞きながら思索を廻らし、時には新しい考えが突然湧き出て来ることもあるでしょう。この『歩み』

の「植樹会関連トピックス」の中で母校の先輩の方々、そして諸先生方がいかにキャンパスを愛し、その美しい緑の修景が続くことを願っておられたかを強く感じさせるメッセージが沢山あります。

植樹会はこのようなキャンパスを維持・保全して行くだけでなく、同時にその底流にある精神を後世に伝えて行くことも重要な使命だと考えて活動を続けています。


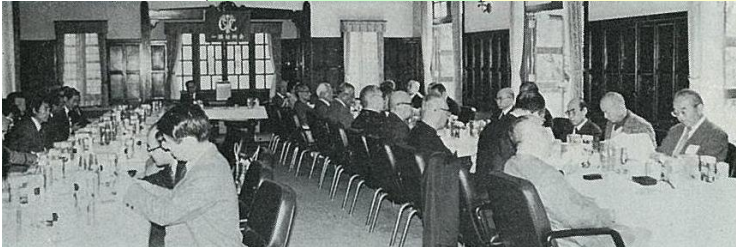
平成27年8月
一橋植樹会会長 八藤 南洋（昭40経）



西暦	植樹会関連トピックス	学内トピックス	学外トピックス
1967 昭42	<p>増田学長の植樹運動提唱</p> <p>「昭和40年代初め、国立キャンパスにある松が異常に多く枯れてゆくのに気づき、何とかこれを食い止めたいと、如水会報に拙文を載せたところ、花いっぱい運動にご熱心であった加藤彌兵衛さんなど多くの会員から関心を寄せられ、母校への植樹運動が盛り上がってきた」(如水会々報)</p> <p>「増田先生は、毎日学内を散策、国立の一木一草を思いを込めてご覧になっておられた。学園紛争当時、先生は一木一草に深い何かがあることに思いをいたし母校の環境を憂える気持ちでご覧になっておられたのであろう」(後年の阿部学長の植樹会総会時挨拶に)</p>		<p>ASEAN 結成</p> <p>EC 発足</p>
1968 昭43	<p>1月 加藤彌兵衛氏(明39本)ら「母校へ植樹を」運動スタート、有志が『募金』を募り、以降毎年大学に寄付</p>	<p>学生自治確認書取り交わし</p>	<p>伊藤整氏(昭6学)芸術院会員となる</p>
1969 昭44		<p>大学紛争</p>	<p>文化庁設置</p> <p>大学紛争</p>
1970 昭45			<p>アポロ宇宙船月面着陸</p>
1971 昭46	<p>総会で挨拶をされる増田四郎副会長</p>	<p>千代田区に「一ツ橋」の町名維持の努力が結実</p>	<p>大阪万博、三島由紀夫自殺</p> <p>沖縄返還協定締結</p> <p>ドルショック</p>
1972 昭47	<p>8月 世話人会が開催された。主だった世話人の方々は増田四郎、加藤彌兵衛、石川善次郎、横田毅一郎各氏</p>	<p>一橋寮竣工</p>	<p>札幌冬季五輪</p> <p>日中国交回復</p>



西暦		植樹会関連トピックス	学内トピックス	学外トピックス
1973	昭48 10月	26日創立総会開催 初代会長に本田弘敏氏(大10本)就任 植樹会の目的と事業 「一橋植樹会は一橋大学のキャンパスの緑化推進、環境整備に必要な援助をすることを目的とする。 「必要な援助」は財政的援助、樹木や草花などを寄付する物的援助ないし労力奉仕などを含む」 (定款から) 同時に、創立総会以降に繰り返し説明されてきた「理念」がこのとき表明されている。 1、学園キャンパスの荒廃に立ち向かうの精神 2、環境整備の一助となる 3、「母校に緑と花」運動に力をいれ会員を増やす 以下、本田弘敏初代会長の挨拶から 「美しい自然の赤松に囲まれた国立の緑深い環境は教育の場として本当に素晴らしいものでした。ところがその後、樹齢のためか、大気汚染のためか松の立ち枯れが目立つに至り、時の増田学長はその対策に腐心、大学の環境保持に努められたのに呼応して、先年来加藤彌兵衛大先輩方が率先「植樹」運動を起こされてきたのであります。今回この運動を組織化することになり『一橋植樹会』が強力に発足することになり……」「……大学百年の大計のため極めて有意義な事業であり……」	学部入学生数 722 名	金大中事件 円相場変動制へ 戦後初マイナス成長
1974	昭49 4月 10月	観桜会開催 植樹会;初年度1年で寄付・会費184万円に上った  ヒマラヤ杉の植樹(1975年)	昭和40年代のキャンパス全景 	
1975	昭50 4月	第2回総会での報告から、「NY支部寄付により金木犀を植樹」	一橋大学100周年記念式典 同100周年記念事業スタート	ベトナム戦争終結 ロッキード事件、毛沢東死去
1976	昭51 4月	第3回総会時に観桜会実施		
1977	昭52 4月	第4回総会開催時に一橋百年記念・渋沢栄一翁の生家訪問・植樹祭・端艇部激励会・寮歌祭合同の懇親会開催 「海外支部の寄付によりカツカイフキ、ツゲを植樹」  植樹記念碑	授業料 96 千円/年となる	日航機ハイジャック事件
1978	昭53 4月	第5回総会開催、本田会長の挨拶から 「会員の皆様の熱心な後援により、母校一橋大学キャンパスの植樹および環境整備のために寄せられた会費および寄付金は、累計600万円余になります。一方、これによる事業のほうも着々と進みまして、……学園紛争のころの荒廃したキャンパスの状況と比べれば、全く今昔の感があるといつてよい位、美しく整備されてまいりました。 古来、『明媚なる山水は偉人を生む』と申しますが、私は、このような環境整備に伴って、一橋大学が邦家のために有為なる人材を生むであろうことを、大いに期待する次第です。私は、本会の事業が草創期を経て、今や成長期に入ったと考えております」		日中平和友好条約調印 大平首相就任 植村直巳犬ぞりで北極点到達 1ドル 200 円を切る
1979	昭54 4月	第6回総会開催	共通一次試験スタート	ソ連アフガン侵攻 サッチャー政権誕生
1980	昭55	第7回総会記録に「『大学キャンパス総合環境整備計画』後援の件を満場一致で可決」 同報告事項中から 「思索の森」の造園(太田可夫教授ゆかり)、アメリカハナミズキ植樹(水上達三氏寄贈)、百周年記念碑の設置	図書館新館竣工	海外旅行本格化 イラン・イラク戦争

西暦		植樹会関連トピックス	学内トピックス	学外トピックス
1981	昭56 4月	<p>第8回総会開催</p> <p>総会後の記念撮影</p> 	<p>授業料 18 万円/年となる</p>	<p>中国残留孤児初来日</p> <p>田中康夫氏「なんとなくクリスタル」で「文芸賞」受賞</p> <p>中教審「生涯教育について」答申</p> <p>気象衛星「ひまわり2号」打ち上げ成功</p>
1982	昭57 2月	<p>増田学長の言葉「初代会長本田氏を偲んで」から</p> <p>「本田さんは、この運動の純粋さに賛同され、いつも「こんな気持ちのよい会はない」といって、終生この運動の推進に尽瘁されたのである。そして毎年春4月に、花見をかねておこなう国立での植樹会総会には、どんなに忙しくとも必ず出席され、樹木の整ってきた小平と国立のキャンパスを見てまわり……」</p>	<p>国立天門市、一橋祭共催スタート</p>	<p>フオークランド紛争</p>
	4月	<p>第9回総会開催、会長に竹村吉右衛門氏(大13学)就任</p>  <p>宮澤学長、竹村新会長、増田副会長、水上達三氏</p>	<p>新如水会館竣工</p>	<p>中曽根政権誕生</p> <p>歴史教科書問題が発生</p> <p>国際捕鯨委員会で、商業捕鯨の全面禁止を決定。</p>
1983	昭58 4月	<p>第10回総会開催、竹村吉右衛門会長の挨拶から</p> <p>「樹木というものはなかなか成長しないように見えながら、案外に早いもので、校内の木々もここ数年の間に見違えるように成長し、戦後の荒廃、学園紛争時代の有様を知る我々にとりましては、まさに今昔の感があります。――中略――問題は、今後これをどういう風に保守していくかであります。環境整備ということは、建設することよりも保守する事が大切で、今後ともこの点につきまして学校当局ともよく相談し、武蔵野の一角にわずかに残りましたこの美しいキャンパスの環境整備に努めたいと存じます」</p> <p>総会報告から、「植樹会創立(昭48)から57年度末までの大学への寄付額は累計で985万円となる」</p>	<p>森社会工学学術奨励金発足</p>	<p>「おしん」視聴率65%</p> <p>三宅島噴火</p>
1984	昭59 4月	<p>第11回総会開催、報告から</p> <p>「学校当局から 記念植樹に際しては造園計画、あるいは維持管理の点から事前協議の要望をいただいた」</p>	<p>一橋大学公開講座第一回開催</p>	<p>グリコ・森永事件</p> <p>多摩川にサケ戻る</p>
1985	昭60 4月	<p>第12回総会開催、会長に水上達三氏(昭3学)就任</p> <p>総会議題、3号議案に関して出席者の発言から</p> <p>「基本問題というのは、最近の植樹会の寄付金の逡減傾向を憂える所から、この運動の基本的あり方を根本的に考えていただきたいという主旨のもので、将来計画を常務理事会に付託して立案していただきたい」</p> <p>総会の様子</p> 	<p>大学で室田助教授(当時)を中心に学内緑化運動</p> <p>都留重人名誉教授ハーバード大学から名誉博士号授与</p>	<p>日航機御巢鷹の尾根に墜落</p> <p>NTT、JT 民営化決定</p>
1986	昭61 4月	<p>第13回総会開催</p> <p>年度報告の中に「東校舎本館の正面玄関付近ほぼ整備した」とある。</p> <p>なおこの年、「国費による環境整備費は18百万円余で松のコモ巻きほか、東校舎体育館・部室周辺、フェンス沿い及び佐野書院等の環境整備しました」との記録あり(如水会々報)</p>	<p>一橋フォーラム21開講</p>	<p>チェルノブイリ原発事故</p> <p>前川レポート</p>

西暦		植樹会関連トピックス	学内トピックス	学外トピックス
1987	昭62	第14回総会開催	如水会大学海外派遣留学制度創設 『一橋論叢』第100巻刊行	JR発足 大学審議会設置法案可決
1988	昭63	第15回総会開催、川井学長の挨拶から 「外国から見えた方々も一様に一橋大学の美しさを賞賛されるが、これもひとえに植樹会が母校の環境美化に尽力されているお蔭と感謝しつつ、こうした支援に報いるためにも大学は研究面からの内容充実に努めてゆきたい」 年度報告の中に「矢野先生銅像周辺整備(樹木剪定、敷石敷設)」とある。		青函トンネル開通 消費税導入
1989	平1	第16回総会開催		天安門事件、ベルリンの壁崩壊
1990	平2	第17回総会開催、会長に植松健悟氏(昭14学)就任		バブル崩壊 長期不況へ
1991	平3	第18回総会での報告から「産業経営研究所の西南側環境整備(植栽および遊歩道設置)に注力した」	宮川教授図書館長に就任	湾岸戦争勃発 ソ連邦崩壊
1992	平4	第19回総会開催、塩野谷学長の挨拶から 「母校キャンパスはお陰様で日本国内では相対的には良好である、しかし、今後は環境の維持・管理が植樹以上に大事になる。植樹した樹木の全体の調和を維持し管理していくことがこれまで以上に大切である。…本来ここ国立キャンパスは松風の吹くところであった」	国際交流会館完成	銀行不良債権問題激化
1993	平5	第20回総会での報告から 「平成5年度 第一新館南側環境整備に注力した」	38機関との間で国際交流協定締結	Jリーグ開幕 細川内閣成立
1994	平6	第21回総会開催、その議事録から 「故茂木啓三郎理事の追悼に当たっては、『募金というものは集まった金額の多寡ではなく、寄付に参画されたかたがたの人数が大切だ』と生前おっしゃっておられた」		
1995	平7	第22回総会開催	佐野書院改築完成 留学生総数300名を超す	阪神大震災 公定歩合を史上最低の0.5%に引き下げ
1996	平7	第23回総会での報告から 「昨年度東キャンパス合同棟周囲の環境整備に注力した」	小平キャンパスの改革・国立への統合・移転	

80年代と90年代の一橋植樹会

白石 武夫(昭35法)

私が如水会事務局の総務部長、業務部長として、植樹会の運営にかかわっていたのは1983年4月から2002年4月までのほぼ20年、タイトルの時代区分、その流れの「時」と一致する。

この時期の植樹会の活動状況はあえて一言で言い表せば「マンネリ化」であったといえる。つまり、草創期のあの熱が冷めたかのように年1回の定例総会のみが年中行事と化し、十年一日のごとき筋書きで会が運営されていた。

当時 監事で、植樹会運動に大変熱心であった故中村達夫氏(昭16学後)が、「マンネリに堕した本会をどうするのか、どういう方向に持っていくのか」といったことを総会の場で発言しておられたことを思い出す。マンネリ化の状況を指し示す具体例を思い出すままにいくつか挙げてみる。

- ①総会の題が「植樹会と観桜会」となっており、「お花見がてら総会にどうぞ」といったニュアンスであった。
- ②総会出席者の顔ぶれは、林鷹治大先輩(大12学)、一番下が昭和45年卒の田中襄一、樋浦憲次の両君といった具合でほぼ常連化していた。
- ③78年(昭和53年)の第5回総会までは、毎年会費収入も百万円を超え、母校にほぼ同額を寄付してきたが、第6回あたりからその額も減少傾向になってきた。そのため相応の寄付を維持すべく、87年の第14回総会から、毎年如水会から30万円の補助をうけるようになった。

このような中で、私はある会で、当時植樹会副会長であった増田二郎先生(昭7学、元学長)に「一定の役割を終えた植樹会は解散したらどうでしょうか」と話を切り出したことがあった。すると先生は「白石君、植樹会はいかにも一橋らしい精神運動なんだよ」と爽やかな笑顔で答えられた。それ以来私は、先生のお言葉の哲学的含意を考え続けてきた。(了)



桜咲く小平分校の階段教室などを見学

西暦		植樹会関連トピックス	学内トピックス	学外トピックス
1997	平 9 4月	第 24 回総会開催、植松会長の挨拶から 「東校舎周辺の緑化と小平跡地の環境整備に取り組む」	東キャンパス講義棟 2号館完成	京都議定書 香港の中国返還 山一証券自主廃業
1998	平 10 4月	第 25 回総会後の懇談の場で 「国の予算で計上している大学の緑地整備費3千万円と対比してその5%にも達しない植樹会の寄付金のあり方に改めて疑問を提起、現時点の 5 倍を目標にした方策を講ずるべし」との提案があった。	大学の付属図書館がランキング 1 位に評価される(朝日新聞)	イラク空爆
1999	平 11 2月 4月	石学長論文「キャンパスは大学の顔」を「国立学報」に寄稿 第 26 回総会開催、石学長の挨拶から 「ゴミは自分の顔に泥を塗りたくるようなものだ。キャンパス内に散乱するゴミはまさに大学の顔を汚し、いくら研究・教育面で名声をあげても良い大学だとは胸をはって人前で誇れない。……学内がきれいになったといわれるよう努めたい」	 石 弘光学長	石原都知事誕生
2000	平 12 4月	第 27 回総会での報告から 「東キャンパス校舎棟の南側の環境整備に注力した」	大学院重点化完了 入学生総数 1042 名	沖縄サミット
2001	平 13 4月	レバノン杉 小平キャンパスに植樹 第 28 回総会での植松会長の挨拶から「本植樹会としては引き続き『東校舎周辺の緑化』が一段落したので、小平地区の緑化にも力を入れてまいりたい」	四大学連合憲章締結	9. 11テロ 小泉政権誕生
2002	平 14 4月	第 29 回総会開催、総会後の観桜会には国立市「桜守の会」大谷氏、動物写真家 大高氏が特別参加	小平国際共同センター新設	食品偽装事件多発 通貨ユーロ統合 日韓共催 FIFA Wカップ開催
2003	平 15 4月	第 30 回総会の場での片柳梁太郎常務理事(植松会長の代理)の言葉から 「昨今、大学当局の緑化整備の努力にもかかわらず樹木や芝生の管理に手が回らず、『汚い危ない負の環境』になりかねない一面も出ているが、緑の環境保全には『不断のきめ細かい手入れ』が必要である」 植樹会から石学長に改革・提言の申し入れ	大学法人法成立、改革始まる 兼松講堂大改修 総合情報処理センター設置	SARS の脅威 イラク戦争
	6月	緑地管理のため調査開始	21 世紀 COE プログラム 3 件採択	 小平のレバノン杉
	7月	現行形式のボランティア作業開始 第一回の参加者 10 数名、HP 立ち上げ		
	12月	「国立キャンパス緑地基本計画」骨格固まる 如水会事務局との連携密接化		
2004	平 16 4月	第 31 回総会開催、会長に岸田登氏(昭 35 経)就任 定款を大幅に改正(要旨) 1、会の目的変更(苗木を提供する植樹会から緑の環境保全を支援する植樹会へ) 2、大学当局を中心に OB と学生の連携強化(学生会員の新設) 3、円滑な会の運営(常務理事、常務理事会の廃止) 総会後に如水会からの言葉 「月一回の緑化維持、環境美化保全の現場作業を既に開始していると聞いております。今後はこの活動に学生諸君にも参加して貰い、教職員、OB、との新しいコミュニケーションの場が実現し、みなで作り上げた美しい緑の環境で、感受性豊かな人材を輩出することを期待しております」 「国立 100 年の森」プロジェクト スタート 顧問に福嶋司東京農工大学教授就任	国立大学法人一橋大学発足 法科大学院開設 北京事務所開設	チェチェン独立闘争 スマトラ沖大地震 日本の「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録 アテネ五輪
	11月	福嶋顧問如水会館定例晚餐会で「基本計画と理念・保全」について講演 ※		
	12月	基本計画策定後初の植樹実施 (※=内容の詳細は HP でご覧になれます。以降同様)	「国立キャンパス緑地基本計画」が承認された 杉山学長就任	

西暦	植樹会関連トピックス	学内トピックス	学外トピックス
2005	平 17 4月 第32回総会開催、会長代行に田中政彦氏(昭35経)就任 7月 キャンパス外研修スタート、初回は群馬県玉原高原(ブナ林)見学 “一橋大学クリーンキャンパス キャンペーン”応援参加	「記念植樹一覧」表完成 緑のデザイン賞受賞	福知山線脱線事故 ロンドン同時多発テロ 郵政民営化選挙
2006	平 18 4月 第33回総会開催、会長に加納誠三氏(昭37経)就任 学生会員からも植樹会理事誕生	「大学植生リスト」完成 第一回ホームカミングデー開催	「国立100年の森プロジェクト」が、文科省が発表した全国国立大学施設管理運営に関する先進11事例のひとつとなる ライブドア、村上ファンド事件
2007	平 19 4月 卒業生記念植樹再開(3月) 4月 第34回総会開催 9月 他大学キャンパスめぐりスタート、初回は玉川大学	レスター・ブラウン博士(アースホリゾン研究所長、一橋大学名誉博士)特別会員となる※ 一橋祭・KODAIRA祭に植樹会として参加、以後毎年継続参加 『小冊子3号』に植生リスト掲載 記念植樹 	世界人口65億人 年金問題発生
2008	平 20 3月 植樹会顧問の福嶋教授に大学より「緑化推進」に対して感謝状贈呈あり。 4月 第35回総会での報告から「年間のボランティア作業参加者数933名を数える。」 9月 他大学キャンパスめぐり 東大駒場キャンパス見学 10月 キャンパス外研修 千葉県亀山で三井物産フォレストと合同研修 11月 キャンパス外研修 玉原高原ブナ林作業	一橋大学基金の募金スタート Global COE Hi-stat Newsletter 発刊 情報基盤センターを設置 国際化推進本部を設置	世界的金融危機発生 北京オリンピック 中国四川省で大地震
2009	平 21 5月 植樹会集会所(施設課分室)新設(3月) 第36回総会開催、会長に旗野友夫氏(昭38経)就任 運動部各部との連携・協働作業の推進強化 6月 キャンパス外研修 玉原高原(ブナ苗木植樹)、11月には神宮外苑、白金自然教育園見学実施 7月 会員1100名を超す キャンパスツアーの整備・ツアーの実施	Global COE Hi-stat Newsletter 発刊 情報基盤センターを設置 国際化推進本部を設置	裁判員制度スタート 民主党政権誕生

植樹会活動に対する想い -小冊子掲載文からの抜粋-

植樹会元会長 岸田 登(昭35経)

大学の緑は教育環境に様々な恵みを与えてくれる。一つは「防音効果」。元々キャンパス周辺は静かであるが、森があることによって更に静かになる。二つ目が「温度調節」。三つ目は「酸素供給」。四つ目は「フィトンチッド(木の精)」を放出する。更に、緑は眼や心の疲れを癒してくれる等、様々な恩恵を与えてくれる。この様に大学の先生方、学生の皆さんは無意識の中に非常に恵まれた環境で、研究・勉強されているということが出来る。

今大学の森は手入れ不足で荒れている。この貴重な財産を後世に引き継いで行こうというのが植樹会の「思い」である。幸い大学当局も思いは同じで、大学緑地全体に関して、『国立キャンパス緑地基本計画』を作成し、緑化維持の計画性、持続性を図ることになった。

先ず、如水会員には更に「母校の緑」に関心を持って頂き、大学当局の方針を充分踏まえながら、出来ることから取り組んで行く方針である。具体的には従来の活動に加え、大学が作成した「国立キャンパス緑地基本計画」に基づき、月一回の緑化維持、環境美化保全の現場作業をボランティア活動として開始した。

今後はこの活動に学生諸君にも参加して貰い、教職員、OB、学生との新たなコミュニケーションの場が実現し、共同作業を通じて一体感が醸成出来ると期待している。また皆で作上げた美しい緑の環境で、感受性豊かな人材を輩出することが植樹会の遠大な目標でもある。樹木は我々人間よりずっと長生きする。母校の森も例外ではなく、この森を世話していくためにも、植樹会を通して先輩から後輩にこの「思い」を伝えて、持続的に行動することは大きな意義があると思う。大学法人化を契機に教職員、OB、学生が一丸となって大学の緑を守っていくことが「自然保護」、「教育環境保全」に繋がるものと考えます。(了)



春の「岸田」ロード

岸田元会長は会長就任直後に急逝されました。原文は「植樹会小冊子(2004年12月発行)」に掲載されたものです。※

2003年4月5日に開催された第30回総会で、一橋植樹会は大きく活動方針を転換しました。この転換期に活躍をされた方の中から福嶋司氏(当時東京農工大学教授)、田崎宣義氏(当時社会学研究科長兼社会学部長)、田中政彦氏(当時植樹会常務理事)に当時は振り返って頂きました。(司会は植樹会佐藤征男氏)

司会：田中さんは故岸田登元会長とともに2003年4月22日、母校に石学長(当時)を訪ねられ、緑の環境改善を促す提言をされたと聞いています。



田中顧問

田中：大学の緑を「よくここまで放っておいたものだ」というのが、当時の率直な思いです。当時、相当たくさんのお木を植えて、キャンパスを緑豊かにしようという意図は、至る所に見えていました。しかし手がつけられなくなった部分があったのだと思います。植樹会の方にも「植樹会の歴史的使命はもう終わった」という意見もありました。然し、折角OBも熱い気持ちを持っているわけだからと、岸田氏と一緒に緑の管理の必要性を申し入れたら、快く大学に受けとめて貰いました。「それなら一緒にお手伝いしよう」という気持ちが盛り上がりました。当時の会員数は150人位で、いってみれば苗木を寄付する人たちの集団、大学の教職員の皆さんや学生は含まれていませんでした。

田崎：大学では緑は大事だという認識があり、「一本たりとも切るべからず」という風潮でした。1999年1月に図書館の拡張工事で大きいヒマラヤスギを伐採しましたが、そこに辿り着くまで学内の議論が大変でした。石学長と安藤図書館長が木の前でお別れの言葉を述べ、2本の木にお神酒をあげてそれでやっとならぬという状態。こんなことでは建物も建てられない。遷移も進む。このままではまずいな、というのが最初の出発点です。お話に出た2003年の4月22日、石先生に呼ばれて学長室に行ったら、田中さんと岸田さんが居られて、そこで「木の手入れをするから頼むぞ」という話になったんですね。そこからです。植樹会が変わって行った事が大学を変える力になったと思います。そしてその頃、知り合いになっていた福嶋先生にお知恵を借りることになりました。

司会：福嶋先生、最初にキャンパスをご覧になって驚かされましたか。

福嶋：いや吃驚しました。

司会：キャンパスの調査もされたんですね？

田崎：そうです。記憶では同年の6,7,8,11月と4回位、全部キャンパスを周って。

田中：福嶋先生は、これは皆が見て、皆の気持ちで決めなきゃならないことだから、よく見て勉強して判断して下さいという事でした。



田崎教授

司会：そうした植樹会と大学が連携する流れの中で、大学は「国立キャンパス緑地基本計画」を2004年12月に決定しましたね。

田崎：福嶋先生に田中さんや施設課の皆さんも一緒になって作って下さったのを大学の正式の方針として決めました。そのずっと以前、2001年11月に福嶋先生にキャンパスを見て頂いた。その時に、「これはゾーニングをして、計画的に管理して行った方がいいですよ、必要であれば私がお手伝いしてもいい」と言って下さったのを覚えています。

福嶋：私は本当にお手伝いをしていただけですから。

田崎：普通、建物の基本計画はどの大学にもあると思いますが、緑地の基本計画を持ったのは、国立大学では多分うちが初めてだと思います。

福嶋：初めてでしょうね。うち(農工大)にもないんですよ。

田中：私が言うのも何ですが、実際は2003年6月に福嶋先生の頭の中には基本計画はもう全部入っていたんです。



福嶋顧問

福嶋：限られた空間ですけれども、武蔵野の自然も残っているし、人の生活する場所でもあるし、植生管理という私の専門部分の「人間との関係」、「自然との関係」のあり方を勉強するのに非常にいいフィールドだという感じはありました。

司会：その後、その基本計画に則って作業を進めてこられました。最初参加者はどうでしたか。

田中：2003年7月から調査と平行してボランティア作業をやったんですけど、少なかったです。10人強位ですかね。

司会：植樹会の学生、教職員、OBと3者での全学運動という意識は最初からですか？

田崎：2003年11月位が最初だったと思います。社会学部の会議室で集まりましたっけ。

福嶋：野鳥などに詳しい中野晶子さんなどの学生もその段階から関与していました。

田中：本来は、学ぶ学生達と、仕事をしたり研究をしている先生方と職員が守っていくものですね。故岸田会長の考え方ですが、学生もただ享受するだけではなく、緑に参画していく。

司会：そういった理念といえるものは意識として浸透してきたと言えますか。

田中：強くそう思います。それはやはり福嶋先生の指導を受けてやっていくでしょう。そうすると、綺麗になって来るから自信がついてくる、それは老いも若きも僕と一緒にだろーと思いません。

司会：こういったことは日本の他の大学であまりありませんね。

田崎：ないと思います。聞いたことがない。子どもは誇るべき活動を持っていると思います。またゼロ・エミッションとゾーニングとボランティアの三つは福嶋先生の始めからのアイデアです。これがまた素晴らしいですね。

福嶋：基本計画策定の時に皆で議論していたら、やはり捨てるものはないと。枯れた木でも置いておけば別の昆虫だって生活できるし、それをまた食べると鳥もいるし、外に資源を出して捨ててしまうよりは、中とでとにかく回すような恰好の方がいいじゃないかという話になったんですね。その時の基本計画の幾つかのキーワードの一つが、今述べたゼロエミッション。

田中：「基本計画」を作る前の調査時にキャンパスを周りまわりました。それこそ竹藪などをかき分け、かき分け。全部綺麗にするというイメージもあったのですが、「そのままの形で残すところもあるんだ」という事をものすごく新鮮に受け取りました。ゾーニングの重要性を納得しました。

福嶋：ゾーニングする上でのポイントは、人間が一番たくさん出入りして使う所と、そうでない所。求める機能も違うわけです。一番人が使う所は憩いの場所であるし、リラックスできるような中心部。その全く逆が周辺部です。周辺部は外とのある意味、隔離の部分、防音とか砂ぼこりを外に出さないという機能もある。同時に手を余り入れないという所で、野生の動物、特に竹藪にはウグイスなんかが生きています。両方の中間部分というのは、桜を多く植えてある部分や武蔵野雑木林の流れを残している部分で人間が使い、自然の力にも任せるといって、その両方の感覚。

司会：緑地基本計画の中には、都市緑地における緑の考え方もありますが、教育・研究というキャンパス機能のあり方もあります。

田崎：80年以上前大学が国立に移ってきた時、「自然環境に恵まれた中で教育し、研究することが、大学にとって一番いい」という考え方があった。それをこれからも維持したいというのが当時の一番の考え方でした。ヨーロッパの僕が訪問した大学では、キャンパスの緑を管理するセクションがちゃんとありました。ところが日本の大学でそういうものを持っているところはどこにもない。大学としてこの緑を大事にしていくことが大切です。またキャンパスの緑は多摩地区の中でも貴重な緑です。それをこれからも維持して大事にしていくというのは、地域社会にとっても大事なことだと思います。

司会：では、今後の活動について考え方を教えてください。



作業の一コマ

田崎：基本計画は大学が機関として決定したものですから、それを活かすことが第一です。また、ただ墨守するのではなくて、必要があれば見直す。それからもう一つは、キャンパスの緑を通して教養が学べる場ができるといいなと思います。

福嶋：作業を7年間やってきて、第1段階は終わったかなという感じはします。それは基本計画に沿って作業した成果が出ていると思いますが、第2段階となると、「伐採した所」「木がない所」に今後どういう緑をつくっていくかということです。東キャンパスを中心にして、もう少し緑の進展があってもいいという感じはしています。それぞれの場所で管理の仕方を考えていかなければいけません。それぞれの場所のカルテを見て、それがどこまで達成できているのか、できていないのか。チェックをやっていくことが必要だと。もう一つは、教育にこの自然をどう生かしていくのか？この必要性は非常にあると思います。

作業だけでいいのか、あるいはカリキュラムの中にそういうものを組み込んで、実際に接するようなフィールドワークをやっていくのか。外からわざわざ講師を招かなくてもOBの方が直接話をするという形があってもいいでしょう。やり方に関していろいろなアプローチができるんじゃないか。イベントとして、遊び心も持ちながら進めることもいい。ススキの草原をつくったなんていうのは月夜の十五夜を見ようかというのがその例です。先はちゃんと見据えていけば、いろいろなことがあってもいいなと。そんな感じがします。

司会：2003年以降ずっと活動してこられた田中さん、今の段階はどこまで来たとお考えですか。

田中：さっき、福嶋先生が第一期が終わったという表現をされましたし、田崎先生も熱き思いがまだ全部実現したわけではないというし、そういった意味では当時を思い出すと非常に大変なエネルギーを私は自分で使ったと今でも思っています。それでもいろいろな視点から見てまだまだやることはたくさんあるという思いです。ですからぜひこれからも植樹会の皆さんには活躍していただきたい、頑張ってもらいたいということです。(了)

Hitotsubashi University

一橋大学国立キャンパス
緑地基本計画

国立大学法人 一橋大学

『基本計画』

(2010年4月如水会館にて)

西暦	植樹会関連トピックス	学内トピックス	学外トピックス
2010	平 22 3月 第二草原ゾーンに着手 5月 第37回総会開催 10月 休日作業初回実施	国立移転 80周年 兼松講堂レジデントオーケストラ誕生 山内学長就任	日本航空会社更生法申請
2011	平 23 5月 第38回総会開催 10月 休日作業第二回実施 11月 新生植樹会ボランティア作業 100回実施	外国人留学生数 689名に	中国 GDP 世界第二位 東日本大震災(3.11)
2012	平 24 4月 「寄付講義:緑の科学」開講※  5月 第39回総会開催 会長に八藤南洋氏(昭40経)就任 会員 1300名を超すとともに、年間作業参加者 1400名弱に達す	YouTube に大学公式チャンネル開設 「一橋大学プラン 135」発表 法科大学院司法試験合格 率 2年連続第一位	東京電力国有化 日銀大幅金融緩和策発表 衆議院選挙、ねじれ解消
2013	平 25 3月 「基本計画」のレビュー現場検証一段落 5月 第40回総会開催 一橋植樹会発足 40年・新生植樹会 10年記念式典開催 6月 キャンパス外研修、町田市図書館小野路訪問 10月 雑木林再生のための植樹始まる	引続き格付け AAA を取得 一橋講堂が大学の手で運営開始	富士山、世界文化遺産に登録 2020 東京五輪決定
2014	平 26 5月 第41回総会開催 6月 「国立キャンパス緑地基本計画」レビュー/検証作業実施 休日作業第五回実施 大径木の測定調査を行う 	科研費、新規採択率全国1位に(10年連続) 夢沼学長就任 CFO 教育研究センター発足と HFLP の開始	消費税率 8% に 米・キューバ 国交正常化へ 外国人旅行者 13 百万人超
2015	平 27 5月 第42回総会開催 休日作業(春季)実施 雑木林再生植樹およびマツの補植継続	HFLP の開始 文科省の『大学施設戦略報告』に国立キャンパスが掲載される	日経平均株価 2 万円超 ギリシャ危機



キャンパスも活動も変わる

植樹会副会長 西村周一(昭42経)

私が植樹会活動に加わったのは 9 年前、自ら作業をする新生植樹会がスタートしてから 3 年目の 2006 年だった。当時は昭 35 年卒、昭 37 年卒の役員が中心になって植樹会活動を組織的なものに進化させようと奮闘中であり、現在の会の組織の大枠はこの時期に確立された。会員数も 06 年 3 月末は 407 人、それが今年 4 月 1 日現在では 1,458 人に達している。如水会々報や HP 他多様な手段を用いて活動の広報に努めた結果、卒業生を中心に理解と共感をえられてきた結果であろう。

活動の骨格のボランティア作業も活発化し、毎月の定例作業のほか、大学祭委員会を支援する特別清掃作業や体育会系クラブの部員と協働でグラウンド周辺の整備作業にも汗を流している。大学への交付金が年々減少し、キャンパスの整備・維持に十分な予算をまわしづらななかで、植樹会のこれら作業の果たす役割は逐年高まっている。幸い近年、学生の参加が積極的となり卒業生を含む 1 回の平均作業参加者数は 100 人前後に増え、作業区域も増えた。

作業歴 12 年の成果は学内外から高い評価を得ている一方、国立移転後 85 年目を迎えるキャンパスの緑は確実に老化が進行している。移転当初からの武蔵野固有の木々、諸先輩が競って植樹された樹木には枯死寸前のもも多い。早めに対策を立て、計画的な伐採と補植を進めながら国立の杜の円滑な世代交代を図る時期に至っている。母校との緊密な連携が求められる所以である。

先般、実施された休日作業には老若男女 120 人余が参加した。締めに応援部 OB リードの下に参加者全員で校歌『武蔵野深き』を歌う姿は一体感に溢れ、元学長増田四郎先生の至言『植樹会は如何にも一橋らしい精神運動なんだよ』を思い出させた。この運動を貴重な遺産として永く引き継がれて欲しいと思う。(了)

思索と創造の道



一橋大学のキャンパスには、幾つもの美しい散策路があります。研究や授業に集中した後の息抜きに、あるいは新しいアイデアを考えながら歩くときの心地よさは格別です。私が特に気に入っているのは、第2研究館の奥から「岸田ロード」に入り、如意団道場の前から硬式野球場の奥の林に分け入り、陸上競技場の外側を回って学生会館に至る道です。春は多種の桜、秋は紅葉、冬は寒椿、そして一年を通して野鳥の囀りが聞こえます。とりわけ、春から夏にかけて、陸上競技場奥の林では鶯の声が艶やかです。学長に就任する前は、朝早くに第2研究館の研究室に出勤し、まずこの道を一回りするのが何よりの楽しみでした。その他にも、職員集会所から本館南側に展開する見事な錦秋の景色、ひょうたん池の奥にひっそりと咲くアジサイ群など、四季折々に見どころが沢山あります。

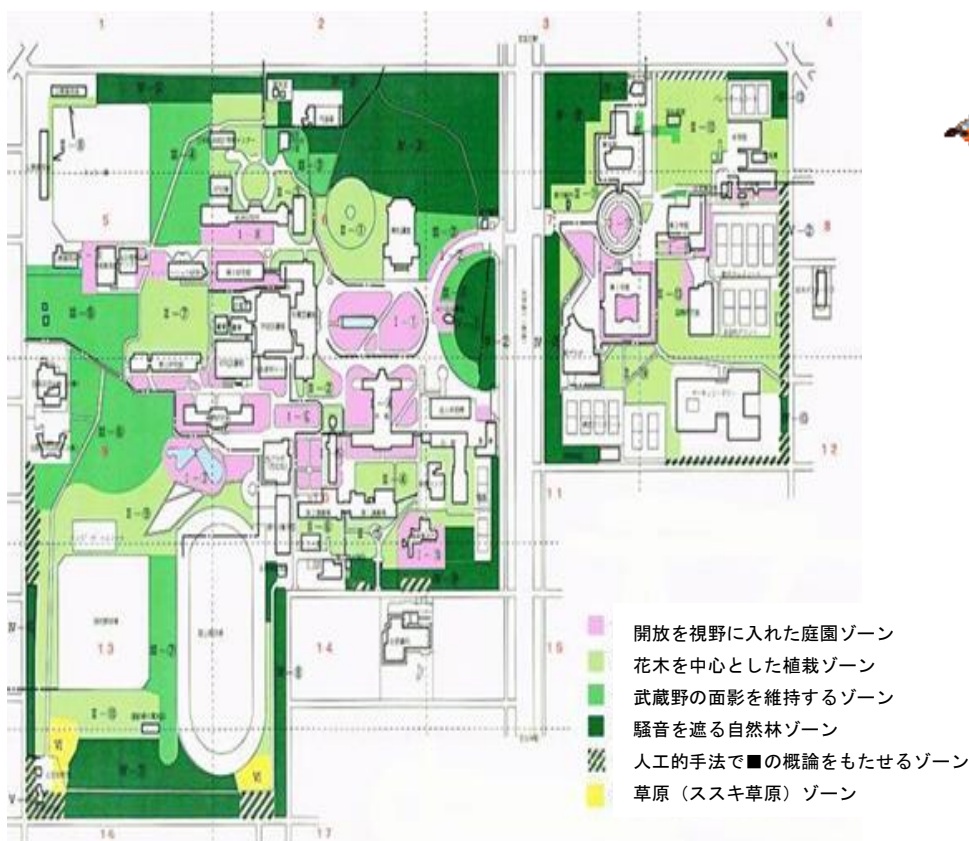
大学は、言うまでもなく研究と教育の場であり、その中心は学生と教職員の活動です。しかし、そうした研究・教育活動は、実は有形・無形の資産によって支えられていることを忘れてはならないと思います。本学では、まず、重厚で気品のある建物群。中心に広場を置き、兼松講堂、図書館、本館、別館をゆったりと配した構図は絶妙です。神田一橋から国立に移転したときに、このように素晴らしいプランを立てた先人達を尊敬するばかりです。

その建物群に、さらに彩を添え、温かさと柔らかみを与えているのが、建物を囲む木々です。私たちは緑のある風景をすっかり見慣れてしまっていますが、もし緑が全くなかったらどれほど殺風景なことでしょう。重厚な建物群と緑が合い高めあって、最高学府にふさわしい思索と創造の空気を醸し出しています。

その美しい緑は、自然に放っておいて保たれるものではありません。常に人の手で整え、新旧の交代も図っていかねばなりません。近年は日本でも里山を保つことの重要性が再認識されるようになりましたが、キャンパスも同様です。国立キャンパスの緑地の管理・保全において一橋植樹会の果たしてきた役割は、まことに多大です。愛校心溢れる本学卒業生が中心となり、教職員や学生も一体となって、キャンパスを美しく保つために協働する姿は、一橋大学だからこそ実現できることです。

大学は常に発展を続けています。研究と教育のために、新たな建物が必要になることもあるでしょう。一橋植樹会とともに、本学の貴重な資産である建物群と緑の調和を図り、思索と創造の場を更に高めていきたいと思います。

一橋大学長 蓼沼宏



左は「国立キャンパス基本計画図」



歴代の植樹会会長、副会長 ならびに一橋大学長、如水会理事長				
	会 長	副 会 長	大 学 長	如 水 会 理 事 長
昭	本田弘敏	増田四郎	都留重人	竹村吉右衛門
48	〃	〃	〃	高橋朝次郎
49	〃	〃	〃	〃
50	〃	〃	〃	〃
51	〃	〃	小泉 明	茂木啓三郎
52	〃	〃	〃	〃
53	〃	〃	蓼沼謙一	〃
54	〃	〃	〃	〃
55	〃	〃	〃	川又克二
56	〃	〃	宮澤健一	〃
57	竹村吉右衛門	〃	〃	〃
58	〃	増田四郎・水上達三	〃	〃
59	〃	〃	種瀬 茂	田部文一郎
60	水上達三	増田四郎	〃	〃
61	〃	増田四郎・長谷川徳次	〃	〃
62	〃	〃	川井 健	〃
63	〃	〃	〃	鈴木永二
平	〃	長谷川徳次	〃	〃
1	〃	〃	〃	〃
2	植松健悟	石川善次郎	塩野谷祐一	〃
3	〃	〃	〃	〃
4	〃	〃	〃	齋藤 裕
5	〃	〃	阿部謹也	〃
6	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	〃	〃
8	〃	〃	〃	伊藤助成
9	〃	〃	〃	〃
10	〃	〃	〃	〃
11	〃	〃	石 弘光	〃
12	〃	—	〃	奥田 碩
13	〃	—	〃	〃
14	〃	—	〃	〃
15	〃	—	〃	〃
16	岸田 登	田中政彦・寺西重郎	〃	江頭邦雄
17	—	田中政彦(会長代行)・加納誠三	杉山武彦	〃
18	加納誠三	國持重明・谷 和久・新里英雄	〃	〃
19	〃	〃	〃	〃
20	〃	國持重明・谷 和久・土田将夫・八藤南洋・新里英雄・田崎宣義	〃	高萩光紀
21	旗野友夫	鈴木 勲・八藤南洋・志田哲朗・佐藤征男・鐘江健一郎・田崎宣義	〃	〃
22	〃	鈴木 勲・八藤南洋・湯川敏雄・佐藤征男・鐘江健一郎・田崎宣義	〃	松本正義
23	〃	八藤南洋・佐藤征男・湯川敏雄・鐘江健一郎・筒井泉雄	山内 進	〃
24	八藤南洋	佐藤征男・湯川敏雄・筒井泉雄	〃	〃
25	〃	佐藤征男・西村周一・湯川敏雄・筒井泉雄	〃	〃
26	〃	佐藤征男・西村周一・湯川敏雄・筒井泉雄	〃	〃
27	〃	関戸康男・佐藤征男・西村周一・津田正道・筒井泉雄	蓼沼宏一	岡本 毅

(敬称略、会長名は年度総会時)
 (背景写真は、国立移転後間もない頃撮影されたと思われます)



平成 20 年前後のキャンパス全景



編集委員会注: 個別には注釈を付して
 ありませんが、本誌編集に際し、大半の資
 料を「如水会々報」、「一橋大学年譜」か
 ら引用、転載しております。

<http://www.hitotsubashi-shokujukai.jp/>